

## 盲人の目を開く論理(ロゴス)

著者	北岡 崇
雑誌名	椋山女学園大学研究論集 人文科学篇
号	25
ページ	p19-37
発行年	1994
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00002979/">http://id.nii.ac.jp/1454/00002979/</a>

## 盲人の目を開く論理<sup>ロゴス</sup>

北岡 崇

彼が歩まなければならぬ思考と言葉の論理とは、実在する他我へと目を開かせその声を聴かせその〈意味〉を理解させる論理、すなわち盲人の目を開き聾者の耳を開き愚者を知恵ある者とする論理<sup>ロゴス</sup>であるだろう。

〔無について語ること〕末尾<sup>①</sup>

預言者イザヤは、神の栄光が輝きいで、人間と大地に神の祝福と恵みが満ちあふれる時を待望しつつ、その時のことを次のように語っている。『イザヤ書』におさめられた記述を一つ引用しよう。

「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ。砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。野ばらの花を一面に咲かせよ。花を咲かせ、大いに喜んで、声をあげよ。……人々は主の栄光とわれらの神の輝きを見る。弱った手に力を込め、よろめく膝を強くせよ。心おののく人々に言え。『雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる』。そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩け

なかつた人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかつた人が喜び歌う。荒れ野に水が湧きいで、荒れ地に川が流れる。……そこに大路が敷かれる。その道は聖なる道と呼ばれ、汚れた者がその道を通ることはない。主御自身がその民に先立つて歩まれ、愚か者がそこに迷い入ることはない。……解き放たれた人々がそこを進み、主に贖<sup>あがな</sup>われた人々は帰って来る。とこしえの喜びを先頭に立てて、喜び歌いつつシオンに帰り着く。喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る<sup>②</sup>」。

バイブルによれば、人間と大地にたいする神の祝福と恵みが満ちあふれるとき、盲人の目を開き聾者の耳を開く<sup>③</sup>神の論理、愚者をその愚かさへの隷属から「贖い」その愚かさから解放する神の知恵が実現する。そのような論理<sup>ロゴス</sup>・知恵を見いだした人の幸福について、『箴言』は、「いかに幸いなことか、知恵に到達した人、英知を獲得した人は。知恵によって得るものは、金によって得るものにもまさり、彼女によって収獲するものは金にもまさる。真珠よりも貴く、どのような財宝もくらべることはできない<sup>④</sup>」と述べている。しかも、金銀にまさる価値をもつそのような論理<sup>ロゴス</sup>・知恵、人を勇気づけ、「嘆きと悲しみ」を忘れさせ、「喜びと楽しみ」にひたらせる神の論理<sup>ロゴス</sup>・

神の知恵は、望みさえすれば誰でも享受できるとバイブルは説く。それは、まさしく神の恵みであるがゆえに、誰でも望みさえすれば、受け取ることができる。すなわち、その人が、みずから享受するものにたいして代価を支払うことなく、無料で、ただで受け取ることができる。それゆえ『イザヤ書』には、次のような言葉もおさめられている。

「渴きを覚えてゐる者は皆、水のところに來るがよい。銀をもたない者も來るがよい。穀物を求めて、食べよ。來て、銀を払うことなく穀物を求め、<sup>あた</sup>価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。なぜ、……飢えを満たさぬもののために勞するの<sup>か</sup>。私に聞き従えば、良いものを食べることが出来る。あなたたちの魂はその豊かさを樂しむであろう。耳を傾けて聞き、私のもとに來るがよい。聞き従つて、魂に命を得よ<sup>5</sup>」。

「<sup>6</sup>価を払うことなく」神の祝福と恵みを享受できるといふこのイザヤの言葉と響きあう言葉を、われわれは、イザヤの生活した時代を幾世紀もくだる紀元一世紀後半に書かれた預言書『ヨハネの黙示録』のなかにも見いだすことができる。「新しい天と新しい地<sup>6</sup>」に神の祝福と恵みの満ちあふれる様を叙述する次の言葉に注目しよう。

「見よ、神の幕屋が人のあいだにあつて、神が人とともに住み、人は神の民となる。神はみずから人とともにいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取つてくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも勞苦もない。最初のものは過ぎ去つたからである<sup>7</sup>。……『事は成就した。私はアルファであり、オメガである。はじめであり、おわりである。渴いてゐる者には、命の水の泉から<sup>あた</sup>価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐ。

私はその者の神になり、その者は私の子となる。……<sup>7</sup>」。

神からの祝福と恵みを渴望する者は誰でもそれを享受できる。ただそれを渴望しさえすればよい。ただそれを求めさえすればよい。

神の意志をもつともよく現わす者<sup>8</sup>という意味において、「神の知恵<sup>9</sup>」と称され、また「神の言葉<sup>10</sup>」あるいは端的に「言葉<sup>10</sup>」と称されるイエス自身が、

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる<sup>11</sup>」、と語っている。

とはいふものの、「申命記」には、神の言葉・神の知恵を託された人、すなわち預言者モーセの次のような言葉が記されているではないか……。

「これは、あなたたちの神、主があなたたちに教えよと命じられた戒めと掟と法であり、あなたたちが渡つて行つて得る土地でおこなうべきもの。……イスラエルよ、あなたはよく聞いて、忠実におこないなさい。そうすれば、あなたは幸いを得、父祖の神、主が約束されたとおり、乳と蜜の流れる土地で大いに増える。聞け、イスラエルよ。われらの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日私が命じるこれらの言葉を心にとどめ、子供たちにくりかえし教え、家に座つてゐるときも道を歩くときも、寝てゐるときも起きてゐるときも、これを語り聞かせなさい。さらに、これをしるしとして自分の手に結び、<sup>12</sup>覚え<sup>13</sup>として額<sup>14</sup>に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい<sup>15</sup>」。

神は、人に、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして」神を愛

すること、すなわち神への献身的な愛を求めていると、モーセは語る。神への献身的な愛を命じるこの掟へとその意味を集約できるその他さまざまな数多くの「戒めと掟と法」を守り、神の命じる道に「ひたすら歩む」とき、はじめて、

「そうすれば、あなたたちは命と幸いを得、あなたたちが得る土地に長く生きることができると、モーセは語る。すなわち、神に愛され神の豊かな祝福にひたり神の恵みを享受することを望むなら、その人は、その日々の生活において、神への献身的な愛を實踐しなければならぬと語っているのである。さらに、モーセは、人が、神への献身的な愛を實踐していないとすれば、つまり「心を尽くし、魂を尽くして御声に聞き従う」ことを拒むとすれば、その人は「命と幸い」をしりぞけ「死と災い」を選びとっていることになるのだと言う……。

「見よ、私は今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。私がお今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道にしたがつて歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、私は今日、あなたたちに宣言する。あなたたちはかならず滅びる。……私は今日、天と地をあなたたちにたいする証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く」。

要するに、モーセは、人が神からの祝福と恵みを享受できるかどうかは、その人が神への献身的な愛を絶えず実践しているかどうかによって決まると言うのである。

『申命記』に記されたこれらの言葉は、先に引用した『イザヤ書』

や『ヨハネの黙示録』の言葉あるいはイエスの言葉とは、どのような関係に立つのだろうか……。先には、神からの祝福と恵みは、誰でもただそれを享受したいと望みさえすれば、「価を払うことなく」、「価なしに」受け取ることができるかと語られていた。しかし、今ここでは、神からの祝福と恵みを享受したいと願うなら、その人は神への献身的な愛を實踐しつづけなければならぬと記されている。

「価」は不要であると語る言葉と献身を要求する言葉、これら二種の言葉のあいだに〈矛盾〉が存在することを認めない人が誰かいるだろうか……。異なる預言者が語っているのだから、あるいは、すべてバイブルに所属する書物であるとはいえず異なる書物に記されている言葉であるのだから、それら二種の言葉のあいだに〈矛盾〉が存在するからといって何も驚くには当たらない、むしろあたりまえのことだ、ということにでもなるのであろうか……。それにしても、そこに〈矛盾〉を認めるなら、その人は、そのような〈矛盾〉を内包するバイブルに、統一性をそなえた言語空間としての資格を承認したり、整合性をそなえた思考体系としての資格を承認したりすることは不可能であると考えるにちがいない。すなわち、バイブルという書物は、自己同一性をそなえた一つの書物ではなく、諸々の書物の雑然たる集合態であるにすぎず、それら諸々の書物をつらぬく同じ一つの論理・知恵がそこに存在しているわけではないのだと考えるにちがいない。それどころか、盲人の目を開く論理や愚者をその愚かさから解放する知恵に言及するバイブルが、そのような神からの祝福と恵みの享受の可能性の条件について、たがいに〈矛盾〉しあう二種の言葉を語るなら、バイブルそれ自身が盲目かつ愚かな言葉を語っているという風に評価するかもしれない。バイブルにたいするこのような評価には、たしかに〈論理性〉がある。また、

実際に、『ヨハネの黙示録』にある招きの言葉、「命の水が欲しい者は、<sup>17</sup> 価なしに飲むがよい」という招きの言葉に魅力を感じその言葉に応じたつもりの人が、その後、神への献身的な愛を要求する言葉に出会い、おじけづき、「話がちがう」と感じるということはありうることだ。このような経験をもった人が、その経験をさほど深く反省することなく放置しておけば、おそらくその人は、その経験の後、神からの祝福と恵みを享受するようにとのバイブルに記された招きの言葉を前にして、たとえば〈旨い話には用心〉とか〈ただほど高いものはない〉とかの世人の知恵で身を処することになるであろう。しかし、人は、このような仕方であるいは自分の目に賢明と考えるその他さまざまな仕方では右の〈矛盾〉に対処しようとして、実はかえって、バイブルをつらぬく統一的な論理・知恵から自己を疎外してゆくことになるのではないか……。少なくとも、バイブルなら、その招きに応じ献身的な愛の要求に聞き従うことを右の〈矛盾〉のゆえに拒む人々のことを、彼らはつまづいていると語るであろう。

たしかに、その〈矛盾〉は、ある一定の見地——その見地を脱する人は稀である——に立てば、やはり矛盾としてしか見えない。しかし、バイブルの全体をつらぬく統一的な論理と知恵にたいして少しでも目の開かれた者なら、その〈矛盾〉は実は外見上のものでしかないと言える思考の境地の存在に気づいているはずである。

※

※

バイブルの言う神、「土の塵」<sup>18</sup> からでさえ一人の生きた人間を創造するという神、道ばたに意味もなくただあるだけの「石ころ」<sup>19</sup> からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」ととバプ

テストのヨハネが語る神、「すべてのものをお造りになった」<sup>20</sup> とバウロが語る神、このような神への信仰に生きる者なら、自分自身も全身が、それゆえ自分自身の心も魂も力もすべて、また目も耳も口も舌も手も足も、さらに知覚したり思考したり言葉を語ったりする能力もすべて、自分のものであるというよりむしろ神のものであると考えるにちがいない。自分自身の一身全体とか自分自身の心とか自分の目や耳とか自分の思想とか言うように、それを自分のものであると考えることがあるにせよ、彼は、そのさい、その所有者であるのみならず考える自己自身という存在を、さらに神のものであると考えるにちがいない。そして、彼は、彼が日々生活する時間、すなわち自分の生涯もまた、神によって生きていることをゆるされている神からの恵みとして理解するにちがいない。そのときどきの社会秩序においてその所有の〈合法性〉が認められている自分の所有物などもちろんふくめ、自己自身に本来所属すべきものなど何もない、すべてのものが根源的には神のものであり、すべてのものを造った神だけがすべてのものにたいする所有権を保持すると考えるにちがいない。そのような神への信仰に生きる者は、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして」神を愛せよという命令に聞き従い神への献身的な愛を実践しつつも、だからといってそのささげた心・魂・力、すなわちその身一つを、神からの祝福を受け取ることにたいして自分が支払う代価と考えることはできない。その代価なるものもともと神のものであるからだ。神の栄光を見る目も、神の言葉を聴く耳も、神を考える思考も、神を賛美する唇も、神に犠牲をささげる手も、神から託された言葉を宣べ伝える足も、元来、すべて神のものであるからだ。神への信仰に生きる者ならそのように考えるにちがいない。

『ヨブ記』には、神の祝福と恵みを豊かに受け「七人の息子と三人の娘」をもち「東の国一番の富豪」であったヨブが、一挙にその息子と娘と財産を失ったまさにその日に語った言葉として、次の言葉が記されている。

「私は裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめ讃えられよ」。

ヨブは自分の息子と娘を、また自分の財産を一挙に奪われ失ったときも、「主の御名はほめ讃えられよ」と語り、神を非難することはない。ヨブは、自分の財産も、自分の息子や娘たちとともに生活するという喜びの日々も、すべて神からの恵みとして神に感謝しつつ享受していたがゆえに、悲嘆のなかにあつても神を信頼し神を賛美したいと願うことができるのである。バイブルの言う神への信仰に生きる者は、自分のものなど本来は何もないのだというその思想において、「私は裸で母の胎を出た」というヨブの言葉に同意する。さらにまた、神のことを「私を胎内に造つてくださった方」というヨブの思考、すなわち自分の生命そのものをすでに神からの恵みとして捉える思考に同意する。そのような信仰に生きる人、たとえばダビデは、胎に生命を宿らせその生命を刻々支えその生命の成長を片時も目を離さず見守り導く神を讃え、歌っている……。

「主よ、あなたは私を究め、私を知っておられる。……その驚くべき知識は私を超え、あまりにも高く到達できない。……あなたは、私の内臓を造り、母の胎内に私を組みたててくださった。私はあなたに感謝をささげる。私は恐ろしい力によって驚くべきものに造りあげられている。御業がどんなに驚くべきものか、私の魂はよく知っている。秘められたところで私は造られ、深い地の底で織りなされた。あなたには、私の骨も隠されてはいない。胎児であった

私をあなたの目は見ておられた。私の日々はあなたの書にすべて記されている。まだその一日も造られないうちから。あなたの御計らひは、私にとつていかに貴いことか。……どうか、私を、とこしえの道に導いてください」。

自分の財産、自分の息子や娘、自分の目や耳、自分の手足、等々を自己自身に所属するものであると信じて疑わない人なら、神への献身的な愛を命じるバイブルの言葉に、神からの祝福にたいする代価の要求を感じることであろう。だが、ヨブやダビデのように、それらをすべて、根源的には神のものであると考え、さまざまな状況下での自分の日々の生活さえも神の恵みと考える人、このような信仰の人は、神への献身的な愛の実践において、神の所有すべきものを神にさしだそうとしているとの思い、本来の所有者に返そうとしているとの思いをいだくことはあるにせよ、神からの祝福にみあう代価を自分のものから支払っているとの思いをいだくことはない。彼は、献身を要求するバイブルの言葉に聞き従いながら「価を払うことなく」神の祝福と恵みを享受しているとみずから語ることできる境地に生きているのである。

とはいえ、そのような信仰の人は、いつの時代でも稀である。人は、社会生活をいとなむさいに、自分のものと考えるもの、つまり自分の体力や知識や財産や社会的地位を用いたり支出したりすることによってその支出にみあう何ものかを自分に所属せしめ自分のものとする権利をもつという思想からほとんど解放されることがないからである。バイブルの言う神への信仰に生きる人の思考の境地を語る私もまた、私の心、私の魂、私の力、私の目、私の耳、私の手、……と、それらが私のものであることを否定することなく、語る。私は、私という存在がいったい何であるのか、私のものとは何のこ

となのか、実はそれほど明確に知っているわけではないが、それでも、私の心、私の魂、私の力、……と語る。それゆえ、自分自身の生活の全体を神からの恵みとして享受する信仰の人の思考の境地を語る私の思考そのものは、信仰に生きる人の思考とは異なる。私は、そのような人の思考の境地を、私自身の見地からいくらか理解することができるといふとどまる。自己自身という存在すなわち自己存在そのものを神からの贈り物と考える思考を実際に生きる人、その思考をただ頭で理解するだけではなく理解しやすいその単純な思考を自己存在の根底に存する真理として実際に生きる人、その思考にたいする理解を、〈論理性〉をそなえた抽象的理解にとどめることなく、自分自身の日々の歩みを照らし導く光とする人は、稀である。そのような稀な例をのぞくすべての人が、ここで、何らかのかたちでつまづいているのである。しかも、つまづいている人々のかかには、それぞれ自分の見地からバイブルを非難する者も少なくない。すなわち、先に述べたように、バイブルの言葉には〈矛盾〉が認められるのであるからバイブル全体をつらぬく同じ一つの思考なるものをそこに見いだすことはできないと主張する人や、さらにすすんで、バイブルの言う神について、自分の理性に納得のゆく不在証明をおこなってその神の存在を承認しないことを正当化しようとする人がいる。だが、このような主張や証明作業において、彼らは、自分が神の存在の根源性をはじめから認めていないということを自分から告白しているだけのことである。それ以上のことは何もしてない。はじめから彼らの思考を制約する確信として、自己自身という存在すなわち自己存在は自分のものであり神のもので神からの贈り物でもないという確信がある。あるいは、主張したり証明したりする自分の理性はバイブルの言う神以上に信頼に値するもので

あるという確信がある。それゆえ、彼らの思考の性格は、信仰の人の思考の性格とはまったく異なるものである。信仰の人にとっては、その思考を制約するものとして、「主を畏れることは知恵のはじめ」というバイブルの言葉が生きているからである。たとえば、バイブルの言う神について、自分の理性に納得のゆく存在証明ないし不在証明をおこなった後はじめて、その神の存在を承認ないし否認するという思考態度は、自分の理性あるいは人間の理性を神に先立つ第一の原理として捉える思考に支配されている。それゆえ、神への信仰に生きていると自認する人々のあいだにさえしばしば見受けられる思考、すなわち、理性による神の存在証明の後にはじめて神の存在を承認するという思考も、バイブルの思考を非難する者がその非難の〈正当性〉を示そうとしてしばしば案出する思考、すなわち、理性による神の不在証明の後にはじめて神の存在を否認するという思考も、ともに等しく、バイブルの言う神への信仰に生きる人の思考の境地から隔絶されており、この境地に参入することも介入することもできない。神への信仰に生きる人は、たとえ誰かが神の不在証明をおこなったとしても、むしろ、その人がそのような証明をなしうるといふこと、そのような証明をなしうる理性をもっているということ、そのことがかえって、その理性、その思考、その人の存在の根拠としての神という創造主を証していると考ええる。バイブルを信頼し神への信仰に生きる人の目には、バイブルへの非難が非難する者の目に納得のゆくものであればあるほど、その非難する者が、バイブルをつらぬく統一論理・知恵からますます遠くその人自身を疎外してゆく様が見えるのである。バイブルを非難する者がまさしくその非難するという行為においてかえって自分から自分の思考態度を支配する根本的な確信がどのようなものであるかを露呈して

ゆくことになるというこの事態を予見しているかのようには、『ヘブライ人への手紙』には、次のように記されている。

「……神の言葉は生きており、力を發揮し、どんな西刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見わけることができる……神の御前では隠された被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけだされているのです」。

だが、「神の言葉」は、それへの信仰をもたぬ者に、それを非難する言葉を語るよう促すことによりその者の思考態度を支配する根本的な確信をさらけださせるといふ「力を發揮する」だけではない。さらに、当人の意識のうへでは「神の言葉」を非難するどころかむしろ「神の言葉」への信仰をもって生活していると自認する人々にさえ、その自認の誤りをさらけださせるという「力を發揮する」のである。そのような例の一つを、われわれは、『ヨハネによる福音書』第九章に見ることができ、そこには、「モーセの弟子」であると自認する人々が、盲人の目が開かれるという一つの奇跡を、モーセの律法についての自分たちの知識と自分たちの理性に納得のゆく思考とをもって割り切ろうと試み、ますます深く無知の闇のなかにおちいつてゆく様子が、その一つの奇跡の体験を介して神への目をあらためて開かれる男との対比のもとに描き出されている。

※ ※

『ヨハネによる福音書』第九章の話は、イエスが、通りすがりに、「生まれつき目の見えない人」を見かけ、その盲目の男に即して「神の業」を明らかに示そうとするところからはじまる。

「……私は、世にいるあいだ、世の光である」。こう言うてから、

イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、『シロアム——「遣わされた者」という意味——の池に行つて洗いなさい』と言われた。そこで、彼は行つて洗い、目が見えるようになって、帰つて来た」。

盲目の目を開かれたその男の驚きと喜びはどれほど大きなものであったことか！ だが、盲人の目が開かれるというこの奇跡を前にして、その男の周辺の人々は、ただ当惑するばかりである。その当惑から逃れようとして、目の見えるその男はあの「生まれつき目の見えない人」とは「似ているだけ」で別人だと言ふ人も出てくる。こうして、奇跡を承認することのできない自分自身や自分と同類の人々を納得させようとしているのだ。しかし、そのような人も、イエスのおこなつた奇跡をその身に体験したその男自身の証言を聞いてさらに当惑を深めることになるだけだ。そして、結局、彼らは、その男を、彼らが彼らの精神的指導者とみなすファリサイ派の人々と公に言いあらわすことを禁じていたファリサイ派の人々がその男の証言にどのように対処するか、癒しの出来事を認定するのだろうか、また、癒しの出来事を認定するならばその出来事にどのような宗教的意味を付与するのか、知りたいと思つていたのである。

奇跡の話聞いて当惑する点では、ファリサイ派の人々にしても、その男の周辺の人々と大差はない。しかし、ユダヤ人の精神的指導者を自認する彼らには、名もない民衆のように他の誰かのもとにその見解をうかがいに行くことも、また当惑したまま宙吊り状態にとどまることもゆるされぬ。彼らは、民衆から、その奇跡の話についてどのような判断をおこなうか注視されているからである。バイブルには、「すでに、イエスをメシアであると公に言いあらわす者

がいれば、会堂から追放すると決めていた」<sup>(40)</sup> 彼らが、自分たちの知識で測り自分たちの理性で思考するかぎりは正当であるとしか思えないその決定にしたがつてこの一件に対処することによりともかくひとまずはそのような決定をおこなった指導者としての体面をとりつくる方向に次第に傾斜してゆく様が描き出されている。彼らは、盲目の目を開かれた男の驚きや喜びに共感したり、そのような驚きや喜びをもたらすイエスのおこないに神の力を見いだしたりするどころか、その男が体験したと語る奇跡を否認したいと次第に強く思うようになってゆくのである。われわれは、バイブルから、彼らが、その男の証言に対処する仕方を読みとることができる。すなわち彼らは、その男の証言の虚偽を立証するための証拠を見つけたそうとしたり、<sup>(43)</sup> その男に、その男の証言が「罪ある人間」の力を証言することになり、その男が証言をつづけるならその男自身その「罪ある人間」の「弟子」<sup>(45)</sup> とみなされることになるという事情を婉曲に悟らせ、その男が自分からその証言をひるがえすよう誘導ないし圧迫したりするのである。彼らは、その男が証言するように「イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであつた」とすれば、癒しをおこなつた「その人は、安息日を守らないから、神のもだから来た者ではない」<sup>(47)</sup> とか「罪のある人間」<sup>(48)</sup> だとか考えているのである。彼らファリサイ派の人々は、自分たちの思考態度を正当化するそれなりに合理的な論拠のあることを十分に自覚している。人は、奇跡の話や証言を聞くのの場合にとどまらず、自分の目の前でその出来事が生じたときさえ、それどころかその身にその出来事を体験したときさえ、その出来事を神からの恵みとしての奇跡としては承認したくないと思うなら、その承認したくないと思う心に促されて、その出来事をその承認したくないと思う心にふさわし

くつじつまのあう仕方で解釈することを願うようになるし、また自分の理性によつてそのような解釈を巧妙に案出することができるものだ。ファリサイ派の人々が、イエスによる奇跡的な癒しの出来事そのものを否認するわけにはゆかなくなり、少なくともその奇跡的な出来事が生じたということだけは承認せざるをえなくなつたとしても、それでも彼らファリサイ派の人々には、たとえば、その奇跡的な癒しの出来事を悪霊の力によつたものと解釈する余地が残されている。その癒しのなされたのが安息日であつたとすればなおさら、そのような解釈へのはずみがつくというものだ。

ともあれしばらく、バイブルの記述を見てみよう。ファリサイ派の人々は、イエスがおこなつた奇跡についての証言をひるがえすことを求めて、その男に言う……。

「神の前で正直に答えなさい。私たちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」<sup>(51)</sup> と。

だが、彼らは、好ましい言葉を彼から引き出すことができない。彼らは奇立ち、その男を「ののしつて」言う……。

「お前はあの者の弟子だが、われわれはモーセの弟子だ。われわれは、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」<sup>(53)</sup> と。

その男は、彼らが「モーセの弟子」として、モーセのもたらした神の言葉に聞き従う者であると自認しそのことを誇りながらも、盲人の目を開くという神の恵みとしての奇跡は承認しようとしないうちに見てとり、彼らにむかつて言う……。

「……生まれつき目が見えなかつた者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。あの方が神のもとから来られたのであれば、何もおできにならなかつたはず

です』<sup>(54)</sup>、と。

この抗弁は、ファリサイ派の人々の自尊心をいちじるしく傷つけたようである。彼らは、〈啓蒙〉によっても〈脅迫〉によってもその男にその率直な証言を撤回させることはできないと知ると、『お前はまったく罪のなかに生まれたのに、われわれに教えようというのか』と言ひ返し、彼を外に追い出した<sup>(55)</sup>、と記されている。つまり、彼らは、結局、イエスをメシアであると公言する者は会堂から追放するという既定方針にしたがってこの一件を処理したのである。

しかし、『ヨハネによる福音書』第九章には、さらにつづいて、イエスが自分の使命について語る言葉と、その言葉がきっかけとなり生じたファリサイ派の人々とイエスとのやりとりが記されている。その箇所を全文、引用したい。

『私がこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる』。イエスといつしよに居あわせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、『われわれも見えないということか』と言った。イエスは言われた。『見えなかつたのであれば、罪はなかつたであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る』<sup>(56)</sup>。

『ヨハネによる福音書』第九章によれば、ファリサイ派の人々は、イエスを神からの最良の音信として受け取ることができない。彼らは、「モーセの弟子」であることを誇り、モーセの律法に通じていることを誇るが、かえってその誇りのゆえに、モーセ以上の者でありモーセの律法を完成する者であるイエスの放つ光<sup>(57)</sup>が見えないというわけだ。その光にたいして盲目でありながら、それでもその盲目についてさらに盲目（無自覚）<sup>(58)</sup>であるがゆえに、彼らは、みずから

誇りとするモーセの律法についての知識を中心に据えたうえで、その見地から人や事柄や出来事を評価し尽くすことができる<sup>(59)</sup>と考えるのである。彼らが、律法についての知識のない者を軽視したり、律法を守ろうとしない人やそのような人と交友を保つイエス自身を非難したりするとき、彼らは、そのように事に対処するみずからの態度の〈正当性〉ないしは〈論理性〉を十分意識している。しかし、彼らファリサイ派の人々の知識には欠陥がある。しかもそれは、致命的な欠陥である。というのは、彼らの誇る知識は、知識である以上、彼らの思考によって支えられているものであるにちがいないが、その思考、つまり彼らとその誇る知識を所有することを彼らに意識させる彼らの思考そのものが、「地のはてに及ぶすべてのものの造り主<sup>(60)</sup>」である神に依存していることを、彼らは事実上忘れてしまっているからである。すなわち、盲目の目が開かれたと言つて喜ぶ男を前にして、その男に即して「神の業」の明らかに示されたことを認めまいとする彼らは、その男から奇跡の証言を聞いたさいに彼らが接触した未知なるものを既知なるもの（彼らの所有する知識）との無矛盾的な連関のなかにもたらし、既知なるものへと還元することにより、自分たちの目に納得のゆく合理性を確保し、こうして当初の当惑を脱し心の平静を回復しようと努めたのであるが、そのさい彼らは、知るといふ彼らの思考の働きそのものが、彼ら<sup>(61)</sup>がその働きにおいて否認しようとする出来事と同じ類の出来事であるかもしれないという可能性、ともに神からの恵みとしての奇跡であるかもしれないという可能性に思いが至っていない。「生まれつき目の見えない人」の目が開くという出来事は、断じて、思考の働きや知るといふ事態が成立するという出来事以上に不可解な出来事というわけではない。イエスは、彼らファリサイ派の人々が、彼らの思考の

働きや知るといふ活動そのもの、いやそれどころか彼らの存在そのものさえすでに神からの恵みである奇跡として成立しているという事実十分に目を開くことなく、その恵みに由来するその恵みあつての帰結でしかない諸々の知識の集積（体系）をもつて、「神の業」を測り切り評価し尽くすことができると思ひ込んでいるところに彼らの盲目があると語っているのである。その盲目に気づかず、盲目性をひそめた、それゆえ断片的でしかない知識の集積（体系）を用いて、その盲目を啓発する光、盲人の目を開く光をしりぞけようとする彼らファリサイ派の人々の思考態度を、さらにイエスは、「罪」と呼んでいるのである。神への信仰を表明しその信仰に生きる者であると自認する人々もふくめ、大多数の人間が、この「罪」をおかしている。『ヨハネによる福音書』の冒頭近くに記された次の言葉のとおりである。

「光は暗闇のなかで輝いている。暗闇は光を理解しなかった。……その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言葉は世にあった。世は言葉によって成ったが、世は言葉を認めなかった。言葉は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」。

しかし同書には、引きつづき、

「しかし、言葉は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」と記されている。

※ ※

バイブルによれば、パウロもまた、「言葉」を受け入れた人の一入である。だが、そのパウロにも、盲目の目を開かれた男を会堂から追放したファリサイ派の人々と同様、イエスの教えに盲目のまま、

イエスを「神の言葉」として迎え入れようとする人々にたいする迫害を率先しておこなっていたときがあった。パウロは、自分の盲目に気づかぬまま、「あのナザレの人イエスの名に大いに反対すべきだと考え」、イエスの弟子たちが「死刑になるときは、賛成の意思表示をし、……会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒瀆するよう強制し、彼らにたいして激しく怒り狂って」いた日々のことを回想しつつ、後に、信仰の兄弟たちにあてた手紙のなかで次のように記している。『ガラテヤの信徒への手紙』から引用しよう。

「あなたがたは、私がかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。私は、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞のあいだでは同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました」。

パウロはまた、『フィリピの信徒への手紙』においても、次のように記している。

「私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人のなかのヘブライ人です。律法に關してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」。

パウロは、彼自身も「ファリサイ派の一員」として、「人一倍熱心」な「ユダヤ教徒」で、「モーセの弟子」として律法に通じていることに誇りをいだく者であった。しかし、そのパウロが、『フィリピの信徒への手紙』から引用した右の言葉につづけて、記している……。

「……しかし、私にとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失とみなすようになったのです。そればかりか、私の

主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他  
の一切を損失と見ています。キリストのゆえに、私はすべてを失  
いましたが、それらを塵あくたとみなしています」。

パウロがこのような言葉を語るようになったのは、彼が、キリス  
トとの出会いを体験した後のことである。その出会いは、パウロの  
場合、まずは、イエスの啓示を前にしてみずからの盲目を思い知る  
こととしてはじまる。

パウロが、イエスの「弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで」  
ダマスコにむかい、その町に近づいたとき、……

「突然、天からの光が彼のまわりを照らした。パウロは地に倒れ、  
『サウロ、サウロ、なぜ、私を迫害するのか』と呼びかける声を聞  
いた。『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、答えがあった。『私  
は、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうす  
れば、あなたのなすべきことが知らされる』。……サウロは地面か  
ら起きあがって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手  
を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、  
食べも飲みもしなかった」。

パウロが神からの恵みとして語る「言葉」、盲人の目を開き聾  
者の耳を開き愚者を知恵ある者とする論理、こうして人を「喜びと  
楽しみ」にひたらせる神の論理とは、まずは、〈矛盾〉としてしか  
捉えようのないものである。すなわち、それを、すでに自分が所有  
する自己自身にとつての既知なるものへと還元しようと試みたり強  
引に既知なるもので割り切つて理解しようとするれば、かえつて自分  
の目を暗闇に直面させることになり、結局はそれを捉えそこなつて  
しまうという意味において、まずは、〈矛盾〉としてしか捉えよう  
のないものなのである。しかし、「目を開けたが、何も見えなかった」

パウロ、「天からの光」におおわれみずからの盲目を自覚したパウ  
ロが、さらに、イエスを、「神の力、神の知恵であるキリスト」と  
呼ぶに至るためには、その盲目の目を、イエスからの使者によつて  
開かれる必要があつた。

イエスの派遣した使者アナニアは、「サウロのうえに手を置いて  
言った。『兄弟サウロ、あなたがここへ来る途中に現われてくださつ  
た主イエスは、あなたがもとどおり目が見えるようになり、また、  
聖霊で満たされるようにと、私をお遣わしになったのです』。すると、  
たちまち目からうるこのようなものが落ち、サウロはもとどおり見  
えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、食事をして  
元気をとりもどした」。

盲目の目を開かれ、「聖霊」に満たされた視覚を得るといふ体験  
を介しイエス・キリストへの信仰をもつに至つたパウロは、かくし  
て、盲目と視覚、無知と知恵、闇と光、愚と賢、弱さと強さの対立  
にかかわる注目すべき言葉を語りつつ宣教活動にのりだしてゆくこ  
とになる。

イエスの死と復活に神の栄光の表現を見る信仰者として、パウロ  
は語っている……。

「……キリストが私を遣わされたのは、……福音を告げ知らせる  
ためであり、しかも、キリストの十字架が空しいものになつてしま  
わぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためである……。  
十字架の言葉は、滅んでいく者にとつては愚かなものですが、私た  
ち救われる者には神の力です」と。

「世の知恵」あるいはその一種である「言葉の知恵」をもつてし  
ては、「福音」の宣教はなしえない。また、「世の知恵」や「言葉の  
知恵」を所有しているからといって「福音」を理解できるわけでも

ない。そのような知恵を信頼する人々、つまり増し加わる神の恵みを享受することなく「滅んでいく者」たちにとっては、イエスの死と復活に神の栄光の表現を見るところは、「愚かな」話であるとしか思えない。イエスの死はイエスの無力を証明しているではないか、彼の死は彼の弱さからの帰結ではないか、あるいは、神の助力を願えば捕えられることもなく生きのびることもできるイエスがその可能性を選択しなかったのは愚かなことではないか、ましてや死人が復活するなどという話は……、このように、「世の知恵」や「言葉の知恵」を信頼する人々は、考えるのである。しかし、パウロは、言う……。

「知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、私たちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまりかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」。

ここでパウロは、すべての人にさしだされた神からの招きを受け入れた者、「信じる者」、「召された者」として、「滅んでいく者」たちにとっての知恵（「世の知恵」や「言葉の知恵」とは異なる知恵、すなわち「神の知恵」が存在することを語り出している。パウロによれば、知恵には二種、「世の知恵」と「神の知恵」がある。それ

ぞれ、パウロが、あの盲目の体験、闇を直視するという体験、無知を自覚するという体験の前の時期に誇り信頼した知恵と、その体験の後の時期、つまり「誇る者は主を誇れ」とみずから語る時期に信頼した知恵である。あの特異な、キリストとの出会いの体験をもつパウロは、それら二種の知恵がその由来においてもその性格においてもまったく異質のものであることを確信するとともに、さらに、「世の知恵」のみを所有する人間にとって「神の知恵」がどのようなものとして見えるのか、「神の知恵」を受け入れその知恵を日々の生活の導きとして活用する者が「世の知恵」やその一種である「言葉の知恵」にどれほどの価値を置くか、これら二点を明確に捉えている。だからこそパウロは、右の引用箇所で、「世の知恵」にとつては愚かで弱い人、あるいは「気が変になっている」人、「悪霊にとりつかれている」人としてしか見えないイエスが反映する神のその「愚かさ」と「弱さ」が、「知恵のある人」、「学者」、「この世の論客」の誰よりも「賢く」、世の「強い」者、権力者の誰よりも「強い」と語ることができるのである。さらにまた、だからこそパウロは、未熟な信仰の兄弟たちを念頭に置いて、増し加わる神の祝福と恵みを享受するという「喜びと楽しみ」にともにひたる時を待望しつつ、次のように書き送ることもできるのである。

「誰も自分を欺いてはなりません。もし、あなた方の誰かが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。……『主は知っておられる、知恵のある者たちの論議が空しいことを』とも書いてあります」。

「言葉の知恵」「世の知恵」にとらわれその知恵をもつことに誇りをいだくがゆえに熱心にイエスの弟子たちを迫害したことのある

パウロは、自戒の念を込めてであろうか、……

「自分は何か知っていると思う人がいたら、その人は、知らねばならぬことをまだ知らないのです」と言う。

しかし、このような言葉、このような思考は、パウロに固有のものではない。パウロ自身も、あの特異な個人的体験の刻印を深く負った右のような言葉を語るさいに、たとえば『詩篇』第九十四篇第十一節（「主は知っておられる、人間の計らいを、それがいかに空しいかを」）を連想させる引用をおこなっていることから推し測ることができるよう、すでにバイブルの諸書に表明された思考・言葉が自分自身の思考・言葉と響きあい調和していることを十分に自覚している。

まず、『箴言』の次の二つの箇所を見てみよう。

「自分自身を知恵ある者と見るな。主を畏れ、悪を避けよ」。

「自分を賢者と思い込んでいる者を見たか。彼よりも愚か者の方がまだ希望がもてる」。

また、『イザヤ書』には、……

「災いだ、自分の目には知者であり、うぬぼれて、賢いと思う者は」と記されている。

このような思考・言葉は、バイブル全体をつらぬく統一的な論理・知恵の一端を表明するものである。だがパウロは、バイブルの言うイエスという神からの最良の音信が世に来た時にふさわしく、その時を幾世紀もさかのぼるバイブル中の諸書ですでに思考され語られていた賢と愚、知恵と無知、光と闇、強さと弱さの弁証法をその極点に至るまで思考しこのうえなく鋭く表現していると言うことができる。

※ ※

イエスは、「私を信じる者が、誰も暗闇のなかにとどまることのないように、私は光として世に来た」と言う。だが、イエスを、「光」、「神の言葉」、「神の知恵」として信じ受け入れこれに聞き従う者は多くはない。大多数の人々にとってはやはり、その「光」は見えず、その言葉と知恵は信じがたい。たとえ信じていることができたとしても、それだけでその人が、イエスの弟子となりその「光」・言葉・知恵をみずからの生活の導きとするとはかぎらない。ヨハネは記している。「……議員のなかにもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかって公に言いあらわさなかった。彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである」。イエスという「光」がその心に輝きわたる人が稀であるというこの状況を、パウロは、次のように説明している。

「この世の神が、信じようとはしないこの人々の心の目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです」。

すなわち、イエスを「光」・「神の言葉」・「神の知恵」として承認しそれに聞き従うことのできない人々とはすべて「この世の神」であるサタンに欺かれていたのだとパウロは言う。「世の知恵」やその一種である「言葉の知恵」で十分であると考え「神の知恵」に気づきもしない人や「神の知恵」をしりぞけようとする人、「神の知恵」を「世の知恵」や「言葉の知恵」に還元できると考える人（たとえばニーチェ）、「神の知恵」のみがなしうる事柄を「世の知恵」・「言葉の知恵」に委ねる人、おぼろしいは「世の知恵」や「言葉の知恵」で

は不十分であると認めるにせよその不足は「世の知恵」の集積や「言葉の知恵」の改革によって漸進的に補完してゆくことができるかと考へる人、あるいはさらにそのような集積や改革による補完なるものは結局は失敗をおわることを認めるにしても人間になしうることは絶えざる集積と改革の活動以上のものではありえないのだと納得し何ものによっても決して満たされることのない空虚を容認しようと思志する人、等々、要するに「世の知恵」やその一種である「言葉の知恵」にいくらかの信頼を置くがゆえにその心に「福音の光」が輝きわたることのない人々、——そのような人々は、パウロによれば、一人残らず、サタンに「心の目」をくらまされ欺かれていた人々なのである。人間が神のもとにたち返りそして増し加わる神の祝福と恵みを享受するために歩まなければならない道を開拓した人としてイエスを捉え、そのイエス・キリストならびにイエスを世に派遣しその歩みを導いた神への信仰に生きる人パウロからすれば、その心に「福音の光」が輝きわたることのない人はすべて、盲目である。彼らの耳は閉ざされており、「彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある」。(92)「彼らの目には神への畏れがない」。(93)だが、それでも、「世の知恵」や「言葉の知恵」に信頼を置くその人は、たとえその「心の目」が「光の天使を装う」サタンにくらまされているとしても、いや、目がくらまされているということが真実であればあるほど、自分自身の盲目に盲目なまま自分のもつ知恵に信頼を置きつつけるしかないのである。

バイブル全体をつらぬく統一的な論理・知恵との調和のもとにパウロが盲目の人として捉える人、つまり自分自身の盲目に盲目な人、——このような人にとって、その目の開かれる時があるのだろうか……。自分のもつ知恵に信頼を置きつつけるしかないその人が、盲

目と視覚、無知と知恵、闇と光の対立について形式的にはまったく逆向きの思考さえ許容する思考の境地に踏み込む時があるのだろうか……。そのような時があるとすれば、それは、彼が、彼自身のもつ知恵を一括して「世の知恵」と捉え、その知恵をその根源から疑う時を措いて他にあるまい。そして、彼が、自己自身という存在すなわち自己存在に気づくとき、すなわちこのうえない自明性をそなえた（自己矛盾的存在）である自己存在、この不可解な存在、この奇妙な存在に気づくとき、自分のもつ知恵の全体にたいする根源的な懐疑が生じるのではないだろうか……。そうであるとすれば、彼が、彼自身の自己存在、このうえない自明性をそなえた（自己矛盾的存在）という不可解で奇妙な存在に気づき、この気づきを介して自分のもつ知恵の全体（ならびにその知恵に即して捉えられる自己の世界）に自己存在の不可解で奇妙な性格が反映していることに気づき、かくして自己存在と自分のもつ知恵の全体（ならびにその知恵に即して捉えられる自己の世界）を謎として発見し、そこに巨大な疑問符を記すとき、この疑問符を記す思考を啓発する光、謎に直面し闇を凝視する盲目の目を開く光が、〈外〉から差し込むということもありうることなのだ。たとえばそのような仕方では、彼が、盲人の目を開き聾者の耳を開き愚者を知恵ある者とする論理と出会うということもありうることなのだ。いずれにせよ、自己存在という不可解な存在、奇妙な存在に気づく者なら、さしあたり〈矛盾〉としてしか捉えることのできない思考や言葉、さしあたり〈無意味〉としてしか考えることのできない思考や言葉に出会うさい、だからといってその思考や言葉をしりぞけることはできない。その〈矛盾〉をばらむ（無意味）な思考や言葉に耳を傾けその闇を凝視すれば、あるいはそこに「福音の光」、「神の知恵」、「神の言葉」、満ちあふ

れる神の恵みとして贈られた神への道を開拓する言葉<sup>コトバ</sup>を見いだすことができるかもしれないという可能性を、彼は否定できないからである。すなわち彼は、彼自身にとつての既知なるものをもってしては決して理解することのできない自己存在という根底において、さしあたりさまざまな〈矛盾〉をはらむ雑然たる書物群としてしか見えないバイブルを神への道を指示する書物として捉える視覚（バイブルの言う神への信仰<sup>66</sup>）を贈られ受け取るという可能性を否定できないからである。もちろんこれは、一つの可能性でしかない。だが、みずからの盲目を深く自覚する者は、その盲目の目が開かれるという類のないこの貴重な可能性を決して否定することができないのである。彼には、モーセやヨブ、ダビデやソロモン、イザヤやヨハネやパウロ、そしてイエスが思考した境地、彼らが思考したのと同じ思考空間に参入しそこで生活する可能性が開かれているように思えるのだ。とはいえ、今は、その可能性へと思考を先走らせないでおこう。というのは、すでにここに、一つ、問題が生じてきているからである。それは、パウロなら、サタン待ち伏せとも呼ぶであろう事態である。

自己存在がこのうえない自明性をそなえた（自己矛盾的存在）であることに気づき、さらに、この不可解で奇妙な存在の不可解さと奇妙さが自分のもつ知恵の全体（ならびにその知恵に即して捉えられるしかない自己の世界）に反映していることに気づいている人がいるとしよう。彼は、自己を、謎にとりかこまれた存在として意識するのであろう。しかも、四方八方を謎にとりかこまれたその自己存在こそがもつとも不可解で奇妙な謎であることを知る彼は、こうして、みずからの盲目を深く自覚していることであらう。その彼が、今、盲人の目を開く論理<sup>ロジック</sup>のことを耳にしたとしよう。そして、耳に

した話や、その話のなかで語られる創造主としての神、イエス・キリスト、「世の知恵」、「神の知恵」、「光」、神の恵み、神への献身的な愛、等々について、いくらかの理解を得たとしよう。しかし、そのとき彼は、その理解を神からの恵みとして捉えるとはかぎらない。むしろ、そのとき彼は、彼が得た理解はすべて彼自身が今もつてい知恵に属するその一部分であつて、その一部分をもふくむ彼自身のもつ知恵の全体（ならびにその知恵に即して捉えられるしかない彼自身の世界）が彼の自己存在の不可解で奇妙な性格を反映する謎であることにあらためて気づくだけではないだろうか……。みずからの盲目を深く自覚する者は、そのような自覚があるからといって、バイブルの言う神・「光」・「神の言葉」・「神の知恵」に、あるいはそれらへの信仰に近いというわけではない。彼は、バイブルの言う神も、「光」も、「神の言葉」も、「神の知恵」も、すべて、彼自身の自己存在すなわち思考する彼自身から紡ぎ出された彼の思想・彼の知恵でしかないと考えることもできるのである。そして、実際に彼がそのように考えたとすれば、そのとき彼は、〈外〉からの光すなわち啓示を承認することをさしひかえていることになる。もちろん、そのとき彼は、少なくとも彼の意識においては、神からその身を遠ざけようとしているわけではない。そのとき彼は、彼自身の自己存在すなわち思考する彼自身から独立する存在としての神、すなわちバイブルにおいて語られるかぎりでの神を認めてはいないのであるから、神から身を遠ざけるにも遠ざけようがない。彼は、彼自身の自己存在すなわち思考する彼自身とは絶対的に峻別された存在としての神なるものもまた、思考する彼自身を俟つてはじめて成立する一つの思想（一つの逆説）であるにすぎずそれ以外の何ものでもないと考えているだけである。彼にたいして、バイブルの言う神

への信仰に生きる者ならこう言うであらう。人が神を思考し神に求めるから神が存在し神が与えるのではない、人が神を思考しないときにも神は存在し、人が神に求めていないときにも神は豊かに与えているのだ、と。しかし、彼の側の思考によれば、人の思考や願望とは独立に自己を啓示する神という存在について語るそのような話そのものが、その話を語る語り手あるいはその話を聞き手の自己存在に由来する一つの思想、一つの知恵なのである。彼は、神と他の何ものかあるいは他のものすべてとのあいだに存在する差異を根源的なものとは考えない。彼は、そのような差異を、彼自身の自己存在が分泌する差異の一つ、いくつもの派生的な差異のなかの一つでしかないと考える。それゆえ、たとえば造物主としての神と造物としての人のあいだに存在する決定的な差異であるとバイブルが主張する差異も、彼によれば、派生的なものではない。彼は、彼自身の自己存在、思考する彼自身、このうえない自明性をそなえた（自己矛盾的存在）と性格づけることのできる彼自身、さらに言い換えるなら「みずからのうちに差異性をはらむことを通してはじめて自己同一性をそなえる存在<sup>97)</sup>」という不可解で奇妙な存在、あるいは謎にとりかこまれた謎のなかの謎、——この一点においてのみ、根源的と形容できる差異を見ることができると思考する。自己存在に見ることのできるこの差異、すなわち自己存在に由来するさまざまな思想ならびにそれら諸思想間に存在する諸々の派生的な差異からの差異のもとに存在する自己存在に見ることのできるこの差異は、すべての思想（ならびにその思想に即して捉えられる世界）の成立を可能にする条件であり、これなくしては、諸思想間の差異の体系である思想空間（ならびにその思想空間に即して捉えられる世界）も壊滅するしかないという意味において、根源的差異と称する

ことができるのである。このような根源的差異の在処である自己存在に注目する彼は、パウロが「世の知恵」およびその一種である「言葉の知恵」と「神の知恵」とのあいだに見た決定的な差異なるものをも派生的な差異の一つとして捉え返すことであろう。自己存在という存在を「あらゆる事物のなかでもっとも奇妙なもの」と呼びその存在こそが「もつともよく証明されている」と語るニーチェもまた、そのような思索者の一人であった。ニーチェもまた、「このうえない誠実に自己の存在を語る」自己存在の不可解さと奇妙さを洞察し、かくしてみずからの盲目を深く自覚しつつも、バイブルの言う神や「神の言葉」や「神の知恵」を、おのれの自己存在から紡ぎ出された一つの思想、一つの知恵として捉え尽くすことができると思考したのである。自己存在という謎に直面し、闇を凝視するおのれの目の盲目を自覚する者にとつては、ともあれ今、バイブルの思考とニーチェの思考が出会う場で思考すること、パウロ風に言うなら神とサタンとの対話に耳を傾けることが肝要であるように思えるのである。

注

- バイブルからの引用ならびにバイブルへの参照は、共同訳聖書実行委員会、「聖書 新共同訳——旧約聖書統篇つき」、日本聖書協会、一九八七年、による。当該箇所は、バイブルを構成する各書のうちの当該書の名称とその書物の章節を記し明示する。なお、引用にさいし、いくつかの表記（仮名と漢字）をあらため、地の文との統一をはかった。
- (1) 拙稿「無について語ること」、「福山女学院大学研究論集」第二二号第二部、一九九〇年二月、七一頁。
  - (2) 『イザヤ書』三五の一—一〇。
  - (3) 『詩篇』一四六の八、『イザヤ書』二九の一八、四二の七、一六、『マタイ』による福音書』九の二七—三〇、『マルコ』による福音書』七の三一—三七、『ルカ』による福音書』七の二二—二三、等を参照せよ。
  - (4) 『箴言』三の一三—一五。

- (5) 『イザヤ書』五五の一―三。  
 (6) 『ヨハネの黙示録』二二の一。  
 (7) 『ヨハネの黙示録』二二の三七。なお、『ヨハネによる福音書』七の三七、『ヨハネの黙示録』二二の一七、も参照せよ。  
 (8) 『ヨハネによる福音書』四の三四、五の三〇、六の三八、一七の四、『ヘブライ人への手紙』一の三、等を参照せよ。  
 (9) 『コリントの信徒への手紙』一の一の二四、三〇。なお、『マタイによる福音書』二二の四二、『コロサイの信徒への手紙』二の三、も参照せよ。  
 (10) 『ヨハネの黙示録』一九の一三、『ヨハネによる福音書』一の一―一八。なお、『ヘブライ人への手紙』一の二、も参照せよ。  
 (11) 『マタイによる福音書』七の七八。なお、『エレミヤ書』二九の一―一四、も参照せよ。  
 (12) 『申命記』六の一―九。  
 (13) 『ヨハネの手紙』一―五の三、を参照せよ。なお、『ヨハネによる福音書』一四の二三―二四、も参照せよ。  
 (14) 『申命記』五の三三。  
 (15) 『申命記』三〇の二。  
 (16) 『申命記』三〇の一五―一九。  
 (17) 『ヨハネの黙示録』二二の一七。  
 (18) 『創世記』二の七。  
 (19) 『ルカによる福音書』三の八。  
 (20) 『エフェソの信徒への手紙』三の九。なお、『創世記』一の一―二の二五、『イザヤ書』四〇の二八、『ヘブライ人への手紙』一の二、三の四、等も参照せよ。  
 (21) 『出エジプト記』一九の五、『ローマの信徒への手紙』一四の八、『コリントの信徒への手紙』二―六の一九―二〇、『エフェソの信徒への手紙』一の二四、『ペトロの手紙』一―二の九、を参照せよ。  
 (22) 人にその所有物を所有することの(合法性)を保証するそのときどきの社会、国家、等における「權威」そのものが、バイブルによれば、神によって存立をゆるぎられているかぎりでのみ存立できるからである。たとえば、『ダニエル書』四の一四、一九、『ローマの信徒への手紙』一三の一、を参照せよ。  
 (23) 『出エジプト記』一九の五、『申命記』一〇の一四、『ヨブ記』四一―三、『詩篇』二四の一、五〇の二二、『コリントの信徒への手紙』一〇の二六、等を参照せよ。  
 (24) 『歴代誌上』二九の一〇―二〇、に、神殿建築の準備をすすめるダビデの祈りが記されている。その祈りのなかに次のような言葉を見ることが出来る。「偉大さ、力、光輝、威光、栄光は、主よ、あなたのもの。まことに天と地にあるすべてのものはあなたのもの。主よ、国もあなたのもの。……私たちの神よ、今こそ私たちはあなたに感謝し、輝かしい御名を賛美します。このような寄進ができるとしても、私などはたして何者でしょう、私の民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、私たちは御手から受け取って、さしだしたにすぎません。……私たちの神、主よ、私たちがあなたの聖なる御名のために神殿を築こうとして準備したこの大量のものは、すべて御手によるもの、すべてはあなたのもです」(『歴代誌上』二九の一―一四、一六)。  
 (25) 『ヨブ記』一の二三、一〇。  
 (26) 『ヨブ記』一の二一。  
 (27) 『ヨブ記』三二の一五。なお、『詩篇』一二七の三、『イザヤ書』四四の二、二四、も参照せよ。  
 (28) 『詩篇』一三九の一、六、一三一―一七、二四。なお、『コヘレトの言葉』(伝道の書)一一の五、を参照せよ。  
 (29) 『詩篇』一一の一〇、『箴言』一の七、九の一〇。  
 (30) 思弁的理性による神の存在証明の無効を明らかにしつつ、「私は、信仰に席を与えるために、知識を廃棄しなければならなかった」と語るカントは、本稿本文に述べた「隔絶」を十分に意識していたものとと思われる (Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, BXXX)。  
 (31) 『ヘブライ人への手紙』四の二二―二三。なお、『ヨハネによる福音書』二二の四八―五〇、も参照せよ。  
 (32) 『ヨハネによる福音書』九の二八。  
 (33) 『ヨハネによる福音書』九の一―四。  
 (34) 『ヨハネによる福音書』九の五―七。  
 (35) 『ヨハネによる福音書』九の九。  
 (36) 『ヨハネによる福音書』九の九―一一。  
 (37) 『ヨハネによる福音書』九の二三。  
 (38) 『ヨハネによる福音書』九の三一。

- (39) 『ヨハネによる福音書』九の一四—一七。  
 (40) 『ヨハネによる福音書』九の二二。  
 (41) 『出エジプト記』二〇の八—一〇、三四の二二、三五の二、『申命記』五の二—一五、『ヨハネによる福音書』五の二—一八、九の一四、一六、等を参照せよ。  
 (42) 『ヨハネによる福音書』九の一四—三四。  
 (43) 『ヨハネによる福音書』九の一八—二二。  
 (44) 『ヨハネによる福音書』九の二四。  
 (45) 『ヨハネによる福音書』九の二八。  
 (46) 『ヨハネによる福音書』九の三四。  
 (47) 『ヨハネによる福音書』九の三六。  
 (48) 『ヨハネによる福音書』九の六六。  
 (49) 『ルカによる福音書』一七の一—一九、を参照せよ。ここに、イエスによってらい病を癒された一〇人の人のうち、イエスに「感謝」し「神を賛美するために戻って来た」のは一人の「サマリア人」だけであったと記されている。人がその身に奇跡的な治癒を体験したときでも、その体験がその人を神への信仰に生きるよう促す場合はきわめて稀なことであるようだ。  
 (50) 『マタイによる福音書』九の三二—三四、一一の二二—二四、『マルコによる福音書』三の二二、『ルカによる福音書』一一の一四—一五、を参照せよ。  
 (51) 『ヨハネによる福音書』九の二四。  
 (52) 『ヨハネによる福音書』九の二八。  
 (53) 『ヨハネによる福音書』九の二八—二九。  
 (54) 『ヨハネによる福音書』九の三二—三三。  
 (55) 『ヨハネによる福音書』九の三四。  
 (56) 『ヨハネによる福音書』九の三九—四一。  
 (57) 『マタイによる福音書』五の一七、『ルカによる福音書』四の二六—二八、二四の四四、『コリントの信徒への手紙』二『三の七—一』、『ガラテヤの信徒への手紙』三の二—二五、『コロサイの信徒への手紙』二の二六—二七、『ヘブライ人への手紙』三の三、一〇の一—九、等を参照せよ。  
 (58) 『ヨハネによる福音書』五の四五—四六、を参照せよ。  
 (59) 『イザヤ書』四〇の二八。

- (60) 『イザヤ書』二九の一四、『エレミヤ書』八の八—九、等を参照せよ。  
 (61) 『ヨハネによる福音書』一の五、九—一。なお、『ヨハネによる福音書』三の二六—二〇、も参照せよ。  
 (62) 『ヨハネによる福音書』一の二二。  
 (63) 『使徒言行録』二六の九—一一。なお、『使徒言行録』八の一—三、二二の二—五、一九—二〇、『テモテへの手紙』二『一の二三、等も参照せよ。  
 (64) 『ガラテヤの信徒への手紙』一の一—一四。  
 (65) 『フィリピの信徒への手紙』三の五—六。  
 (66) 『フィリピの信徒への手紙』三の七—八。  
 (67) 『使徒言行録』九の一。  
 (68) 『使徒言行録』九の三—九。なお、『使徒言行録』二二の六一—一、二六の二二—二六、も参照せよ。  
 (69) 『コリントの信徒への手紙』一『一の二四。  
 (70) 『使徒言行録』九の一七—一九。なお、『使徒言行録』二二の二二—一六、も参照せよ。  
 (71) 『コリントの信徒への手紙』二『一の二七—一八。  
 (72) 『コリントの信徒への手紙』二『一の二〇。  
 (73) 『パウロの言う「言葉の知恵」なるものの性格については、『コリントの信徒への手紙』一『二の二—三、を参照せよ。  
 (74) 『マタイによる福音書』二七の三九—四四、『マルコによる福音書』一五の二九—三三、『ルカによる福音書』一三の三九、等を参照せよ。  
 (75) 『マタイによる福音書』二六の四七—五四、を参照せよ。  
 (76) 『マタイによる福音書』二二の二三、『使徒言行録』四の一—三、一七の二六—二〇、二六の八、『コリントの信徒への手紙』二『一五—二二—二三、等を参照せよ。  
 (77) 『コリントの信徒への手紙』二『一の二〇—二五。  
 (78) 『コリントの信徒への手紙』二『一の三二、『コリントの信徒への手紙』二『一〇の一七。なお、『エレミヤ書』九の二二—二三、も参照せよ。  
 (79) 『マルコによる福音書』三の二二、『ヨハネによる福音書』七の二〇、一〇の二〇。  
 (80) 『コリントの信徒への手紙』二『二の六—一六、『ヨシユア記』二『三の九—一〇、『サムエル記上』一七の四—五二、等を参照せよ。

- (81) 『コリントの信徒への手紙 一』三の一八―二〇。  
 (82) 『コリントの信徒への手紙 一』八の二。  
 (83) 『箴言』三の七。  
 (84) 『箴言』二六の二一。  
 (85) 『イザヤ書』五の二一。  
 (86) 『ヨハネによる福音書』一二の四六。  
 (87) 『ヤコブの手紙』二の一四―二六、を参照せよ。  
 (88) 『ヨハネによる福音書』一二の四二―四三。  
 (89) 『コリントの信徒への手紙 二』四の四。  
 (90) 『マタイによる福音書』四の八一―一、『ルカによる福音書』四の五―七、『ヨハネの手紙 一』五の一九、等を参照せよ。  
 (91) 『申命記』一八の一八、『ヨハネによる福音書』二二の四九―五〇、等を参照せよ。  
 (92) 『ローマの信徒への手紙』三の二三。  
 (93) 『ローマの信徒への手紙』三の一八。  
 (94) 『コリントの信徒への手紙 二』一の一四。  
 (95) 拙稿「無について語ること」、『椛山女学園大学研究論集』第二二号第二部、一九九〇年二月、六五―七一頁、を参照せよ。本稿本文の以下の論述全体が、参照箇所での論述を前提している。  
 (96) 『ヘブライ人への手紙』一の一、を参照せよ。  
 (97) 拙稿「無について語ること」、『椛山女学園大学研究論集』第二二号第二部、一九九〇年二月、六七頁。  
 (98) Kröners Taschenausgabe Band 75, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1969 (Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra, 1883-1885), S. 32.  
 (99) *ibid.*